母と子の仏教むかし話 ③

かごいっぱいの花

花岡大学

ほか10編

母と子の仏教むかし話③
かごいっぱいの花　―ほか10編
昭和五五年一〇月三〇日発行
著者　花岡　大学　ほか
発行所　㈱国際情報社
発売　㈲光書房
〒150 東京都渋谷区東一―二八―六
電話〇三（四〇七）六一四六
振替東京　五―三六五四八
印刷　三協美術印刷㈱
国光印刷㈱
定価　九八〇円
© KOKUSAI JOHO SHA 1980
落丁本・乱丁本はお取替いたします。
8093-79020-7186

母と子の仏教むかし話③

かごいっぱいの花

花岡大学
ほか10編

国際情報社

カバー・表紙・とびら　瀬辺雅之
口絵・さしえ　こざかしげる

「大臣シナ」より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「恩がえしをしたサル」より

もくじ

もくじ

母と子の仏教むかし話

赤い目のコマイヌ　9
大臣シナ　24
すがたをぬすまれた若者　33
ワシにさらわれた赤ちゃん　41
観音さまが身がわりに　52

ナムアミダブツ……63
かごいっぱいの花……79
天の鼓……88
恩がえしをしたサル……106
長者ともらい子……122
恩をあだでかえした毒ヘビ……141
あとがき……156

赤い目のコマイヌ

浜田広介

むかしむかし、阿波の国、徳島という町から見える沖あいに、小さな島がありました。

海から出ている島のかたちが、空から見ると、おかめの面にていたのでもありましょうか。だれいうともなく、世間の人は、その島を〝おかめ島〟とよんでいました。

島のまわりを歩いても一里もないというような小さな島でありましたが、島びとは力をあわせて、りょうにでかけて、いつもたくさん海の魚をとりました。

しぜんと、くらしがゆたかになって、人びとは、たのしく、その日をおくってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ました。

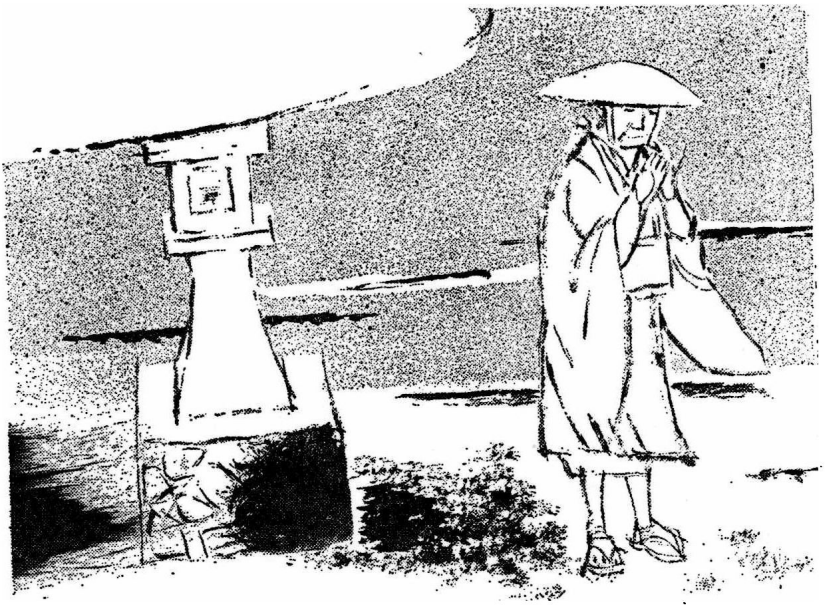
ある日、ひとりの坊さんが、旅のすがたで、この島にわたってきました。

坊さんは舟から出ると道に止まって、さっそくに、ほとけの教えを説きだしました。

そばには、人が五、六人しかおりません。

その人たちに、坊さんは、教えを説くのでありましたが、その説きかたが、わかりよく、また、おもしろくてなりません。

話をきこうと、人びとが、だんだん



と寄ってきました。

十人、二十人、三十人と、人のあたまがふえてきました。人かずがおおくなって、坊さんのまわりは、しんとしずまりかえって、聞き手のせきが、ときどききこえるだけでありました。

「なんと、じょうずな説教だろう」

「旅のすがたは、みすぼらしいが、よっぽどえらいお坊さんにちがいない」

「どこからおいでになられたか」

小さな島の人たちは、小さな声で、そう、くちぐちにささやきました。

坊さんのうわさは、はやくも島じゅ

うにひろがりました。
島びとたちは、よろこんでお説教をきこうとしました。
坊さんに夜のお宿をおかしして、ていねいにもてなしました。
日が、なんにちか、たちました。
旅から旅の坊さんでは、一つ所にそう長くとどまるわけにいきません。
ある日の朝に、坊さんが、わらじをはいて言いました。
「島のみなさん、いろいろと、ごしんせつにしてくださって、ありがとう。わたくしは、また、旅から旅をめぐらなくてはなりません。お別れの今、お聞かせしたいひとことは、それこそ、なかなかだいじなこと」
それは、この島〝おかめ島〟は、ふしぎな島の一つであって、いつかは、きっと、海のふかみにおちこんで、見えなくなってしまうというのでありました。
島びとはびっくりしました。
顔いろをかえ、にわかに、みんな目をひからせて、きょろきょろしながら言いま

した。
「おかしなことを言うではないか」
「だしぬけに、いやがらせを言う。どういうわけかな」
「にせ坊主かもしれないよ。出かけるきわに文句をつけて、金をださせるつもりかな」
ののしりごえをだしかけるものもいました。
「おちついてお聞きください。にせ坊主、うそつきと、いわれようとも、このわたくしはかまいません。ただ、みなさんが、かわいそう。話さなければなりません。島のかしらを、よんでください」
坊さんは、しずかに言って、手ぎわよく、人のさわぎをおさえていました。
島のかしらが、まえに来ました。
坊さんが、言いました。
「かしらさん、あなたは、これから、毎朝に、ちんじゅの社にまいられて、あの、

コマイヌの顔を見なさい。もし、イヌの目が赤くそまっていましたら、その日の夕方、島は、しぜんに海にしずんでいくでしょう。気をつけなさい。そうなりましたら、にげる仕度をなさらなければなりません」

島のかしらは、がてんをしました。

坊さんは、小舟にのって島をはなれていきました。小舟は、しだいに小さくなって、海のむこうに見えなくなってしまいました。

「今の話は、ほんとうだろうか」

島のかしらは、いっとき、うたがいかけました。

「だが、それが、うたがわしくても、社にまいって、島の安全、人びとの無事をいのっていくことは、島のかしらのつとめでもある。そうか、それではそうしよう」

さすがに、かしらは、よいふんべつを持っていました。

☆

夜があけかかると、手をあらい、口をすすいで、かしらは社に行きました。

ちんじゅの社は、島の中ほど、奥ふかい森にまつってありました。

社のまえに、右と左と、一つずつ、石にきざんだコマイヌが、社の番をするようにすわっていました。

島のかしらは、その日から、毎日毎日、おまいりをつとめていました。コマイヌは同じ所に立っていました。石の目は、いつものように森のどこかを見ていました。

こうして、年がたちました。

ある日、はげしいあらしがおこって、いちにち、ひと晩、ふきあれました。

あらしが止んで、あけがたに、小さな島の海ばたに、一そうの小舟がながれつきました。

舟の中には、六人の男が乗っていましたが、六人ともに、顔が、みな、青ざめきって死人のようになっていました。

島びとたちは、よりあつまって、しんせつに六人をかいほうしました。

四日五日とたつうちに、六人は、みな、もとのとおりの元気な男になりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com